

鈴木有郷牧師説教

6/12/2011

ペンテコステは教会の始り 使徒行伝 2-1-13

イエスに従う者たちがエルサレムで伝道を始めた時、彼らの言語はアラム語とたどたどしいギリシャ語でした。ですから、外国生まれのユダヤ人達が、イエスの福音の内容を理解することはできませんでした。

しかし今日の聖書のテキストによると、イエス復活後の最初のペンテコステの日に、この問題は不思議な形で解決されたのです。

ペンテコステは、ユダヤ民族にとって最も大切な祝日の一つです。ですから、それを祝うユダヤ人は、ユダヤの地からだけでなく、トルコやシリア、リビア、それに遠くはエジプトからも大勢やってきていて、エルサレムの町は、いわゆるビジターで一杯でした。伝道には絶好のチャンスでした。

不思議なことが起こります。アラム語しか話せない筈のイエスの弟子達は、エジプトの言葉、シリアの言葉、トルコの言葉、リビアの言葉等を駆使して、イエスの福音を語り始めたというのです。そして外国育ちのユダヤ人は自分たちの母国語でそれを理解することができたというのです。

この不思議な物語を、私たちはどのように理解したらいいのでしょうか。

その意味は明らかです。イエスの福音は言語や国籍を超えたユニバーサルなものだということです。外国生まれのユダヤ人たちが母国語で理解した時、イエスのメッセージは、彼らの魂を揺り動かし、彼らの人間性を変革したと言い換えることもできるでしょう。イエスの福音は全人類に開かれている、これがペンテコステのエピソードが指し示す意味です。

だからこそ、キリストの福音は日本語しか話すことのできない、田舎の貧しい人々の魂にも訴えることができたのです。

賀川豊彦という牧師は、1920年代から40年代にかけて、世界で最も知られたクリスチャンの一人でした。神学校を卒業した後、彼は新婚の夫人をともなって神戸の困窮階層の町、新川に牧師として赴任しました。

ある冬の夜、すきま風の吹き抜ける小さな牧師館で数人のメンバーと聖書の学びをしていました。突然ドアが蹴破られ、そこに一人の酒に酔った男が立っていました。

その男の名前はヤスさんといい、土地のやくざで、皆から恐れられていた人物です。奥さんにも子供にも去られて、それまで以上に猛々しい、自暴自棄な人間になっていたのです。

土足で上がり込んだヤスさんは賀川牧師に噛み付きます。「神が何だ。愛が何だ。でたらめを言うのはよせ。余計なお世話だ。新川から出ていけ。」

その時、腰の曲がったお婆さんが、懐から小さなおにぎりを取り出し、ヤスさんに差し出して言いました。「さあお食べ。遠慮しないで食べなさい。キリスト様のおにぎりだよ。」

突然ヤスさんは雷に打たれたようになり、草履を脱ぎ捨てて、すりきれた畳の上に正座し、お婆さんに向かって深々とお辞儀をしました。その小さなおにぎりは、彼女のその日のたった一回の食べ物であることに気づいたのです。

まだ20歳代半ばの賀川牧師は続けて記します。「彼女の、食べなさい。キリスト様のおにぎりだよ」という言葉が、聖餐式の時のキリストの言葉、「これはあなたがたのために裂かれた私の身体です。これを食する度にわたしを思い出し、わたしを記念しなさい」と同じであることに私は気づいていた。イエスは新川に来られた。腰の曲がった貧しいお婆さんを通して、キリストの福音はヤスさんにもたらされた。イエスの福音は言葉を超えて、国を超えてすべての人に与えられている。これは本当だ。」

あの2000年前のペンテコステの日に外国生まれのユダヤ人に福音をもたらした聖霊は、新川にも同じ福音をもたらしたのです。だとすれば、日米合同教会にも福音は新たにもたらされる筈です。

私たちはそのために一生懸命に祈るでしょうか。それとも無関心を装うでしょうか。前者を選べば、後者は捨てなくてはなりません。後者を選べば、前者は捨てなくてはなりません。両方を選ぶという虫のいい話は責任放棄です。日米合同教会の現在と未来は、私たち一人一人の選択にかかっているのです。